

商工部会 樵木林業視察ツアーに参加して



徳島市環境保全課

石山 敬造

Ishiyama Keizo

(環境部門 環境保全計画)

1. はじめに

令和6年9月21日(土)、商工部会の行事で、樵木林業視察ツアー(参加者13名)に参加しましたので、報告します。

2. 樵木林業とは

樵木林業について、ウィキペディアから引用します。

樵木林業(こりぎりんぎょう)とは、現在の美波町や牟岐町といった徳島県南地域の特に日和佐川(ひわさがわ)・牟岐川(むぎがわ)流域で行われてきた暖帯照葉樹林を対象にした択伐矮林(たくばつわいりん)更新法や、魚骨状の搬出道によって伐採、搬出が行われる林業の施業形態のことである。(「樵木林業」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2023年11月26日(日)02:29 UTC、URL: <https://ja.wikipedia.org> 一部改変)

また、本会の会員で、本ツアーを主催してくれた網田さんが2018年の徳島県技術士会会報に原稿を記載していますので、そちらもご参照ください。



3. 樵木林業試験林の見学

樵木林業研究会の柿内事務局長の案内で、牟岐町にある樵木林業試験林を見学しました。このあたりでは1965年(昭和40年)頃まで山から木材を切り出し、牟岐川に流して沖で船に積み替え、関西に運んでいたようです。

山の斜面から木を運び出すためにヤリ、サデという搬出路を作り、木馬(きんま)という、木で作ったそりのようなものに木材を載せて、木馬道を人力でおろしていたそうです。作業の安全を願って、神社や祠があちことに作られています。

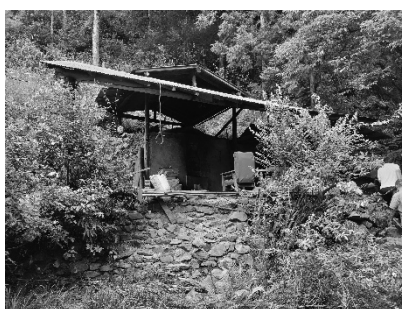
この試験林では、萌芽林を鹿の食害から守るため、利用済の魚網で囲んで、保護しています。



4. 炭窯見学とジビエ料理試食

地元の方が管理されている炭窯を見学しました。炭窯は石と赤土による手作りのものです。炭焼きをしているのは大阪から地域おこし協力隊として定住された男性です。

炭焼きは1回あたり約2週間かかり、年10回くらい行っています。2tの木材から250kgの炭ができ、24時間つきっきりで薪をくべる作業と温度管理を行っています。炭の原料となるちょうどいい太さの木を確保するのが大変なのだそうです。



昼食は地元の方がジビエ料理を準備してくれました。鹿のから揚げ、猪と鹿の焼肉の他、漬物、酢の物、ご飯など、とても美味しくいただきました。



5. 四国の右下木の会社

(1) 製炭場

美波町にある四国右下木の会社の製炭場を、社長の吉田氏の案内で見学しました。吉田社長は美波町の出身で、東京を拠点に活躍されてきましたが、日和佐にサテライトオフィスを立ち上げ、(映画「波乗りオフィスへようこそ」のモデルになった方です) 古くから続く樺木林業に注目され、その施業技術と炭焼きを復活させるべく、ふるさとで会社を興したそうです。



こちらには炭窯が4基あり、主にうなぎや焼鳥を焼くために店で使っている高級炭（備長炭）を焼いていました。ウバメガシを使っており、6tの原料から700kgの炭ができるのに3週間かかります。炭焼きで一番大事なのは、常に一定の良い品質のものを供給することだそうです。そのため必要なのは温度管理で、煙突に温度計を設置し、スマートホンでモニタリングするシステムを導入し、温度を常時確認できるため、夜は現地にいなくても大丈夫です。このようにIT技術を利用することで、労働環境の改善を図っています。

(2) 木材の伐採現場

美波町の海沿いにある原料のウバメガシを伐採する場所を見学しました。こちらは地元の方が管理している共有林です。重機を使って作業路網を整備し、木材を切り出しています。成長するまでに 15 年から 20 年かかるそうで、持続的に木材を生産する計画性が必要です。

また近年カシノナガキクイムシ（通称カシナガ）というナラ枯れを引きおこす虫が蔓延し問題になっています。これはカシ、シイ、ナラを主に巢食う虫でナラ菌を感染させます。これにやられると紅葉したように葉が真っ赤になり、木材がスカスカになり枯死し、倒壊する危険性があります。

当然炭の原料としても使えません。切り出した木材の 30% くらいがカシナガにやられていて使えないそうです。現在のところ被害を防ぐ有効な手立てがなく、頭を悩ませる問題となっています。



6. 林業と過疎地が抱える問題と感想

ここからは、主に私の個人的な感想になります。

私の父は海南町（現海陽町）の山奥で、林業に携わる祖父の家に 8 人兄弟で生まれ育ちました。山の家は祖父が自分で作り、かまど、汲み取り便所（し尿は畑の肥やし）、五右衛門風呂など、昔話に出てくるようなものでした。阿波海南駅から自動車で 30 分以上かかり、私が小学生のころは、暗い山道を杉並木を見ながら父に連れられて里帰りしたのを今でも覚えています。滞在中にすることといえば、親戚の子たちと山で虫取り、栗拾い、川で水遊びでした。何もない不便な場所でしたが、楽しい思い出です。

昔はそれが当たり前で、林業も栄えて収入になっていたのですが、時代が変わり、山の金銭的価値が低くなってしまいました。生活ができないので、人は町に出ていき、過疎が進みました。森林は荒廃し、二酸化炭素の吸収源が減り、地球温暖化の進行、自然災害の発生につながります。

山を守り、木を育てる林業は大事な仕事ですが、収入は高くなく、危険なので人気はありません。そのような現状を解決するため、徳島県は林業アカデミーを開設し、担い手を増やす取り組みをしています。私も本業ではありませんが、ボランティアとして森林や里山の保全や、子供たちに自然体験をしてもらう活動をしています。懐かしい故郷や自然を守るのは、単なるノスタルジーではなく、人間がこの地球で生きていくために本当に必要な場所であり、生きる力が試され養われるだからだと思います。

今後も一技術者として、地域が抱える様々な問題の解決に取り組むべく研鑽を積み、貢献したいと考えています。技術士会は多くの技術部門の専門家集団であり、皆様のご協力ご助言をいただき活動したいと考えていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。